小林隆児

青年期自閉症の精神性的発達について

児童青年精神医学とその近接領域　32(3)；205—217 (1991)

Jap. J. Child Adolesc. Psychiatr., 32(3)；205—217(1991)

〈原　著〉

小林隆児*

青年期自閉症の精神性的発達について

児童青年精神医学とその近接領域　32(3)：205—217（1991）

青年期自閉症の精神性的発達を，性別同一性がいかに獲得されていくかという視点から，9例の自験例を通して検討した。その結果，以下の問題が考えられた。すなわち，1）前青年期の性別役割同一性の獲得を巡る混乱に関連した問題，2）性衝動の高まりと母親への依存欲求の亢進のアンビバレンスによる混乱，3）異性への関心が強まり，その衝動に抗しきれなくなって生じる問題，4）性倒錯的行動が顕在化して生じる問題，5）異性愛の対象の選択を巡る問題，6）自己身体イメージにまつわる女性特有な問題などであった。

以上の結果から，彼らの精神性的発達を促進するための援助として，1）前青年期の母子関係の混乱を少しでも早く収拾させること，2）男らしさの振る舞い方を獲得するために父親の関与を促すこと，3）母子の分離と自立のための心理教育的援助を行うこと，4）社交の場を確保することで異性との交流の機会を作ることなどが必要であると思われた。

さらに人間としての自尊心と若者としての誇りや自信を保つためには，彼らの容姿，身なり，振る舞い方について心を配ることも大切であることを主張した。

Key words：autistic children, adolescence, psychosexual development, gender identity, psychoeducation

Ⅰ．はじめに

子どもの発達の中で最も危機的で波乱に富んでいる時期が青年期であることは自閉症児の場合も例外ではなく，生来的に重いハンディキャップを背負っている自閉症児ではより深刻な事態を迎えやすい[1,3]。そのため，最近ではこの問題が積極的に取り上げられるようになってきた[6,9,10,12,13]。しかし，青年期が人格発達の形成上大きな飛躍の時期であることも確かで，臨床現場では自閉症においても青年期が発達の飛躍的契機となることも少なくない[5,9]。従って自閉症児の青年期の発達の様相を力動的に解明していくことは彼らの発達援助を考える上で不可欠である。

小林[6,7]は自閉症児が青年期の発達課題をどのようにして乗り越えていくかを検討しているが，青年期の中心的課題である性別同一性 gender identity をめぐる問題については最近までほとんど論じられることがなかった[4,16]。

そこで筆者は，この機会に青年期の精神発達課題が自閉症児にとってどのような困難さをもたらすかを特に性 sex にまつわる問題に焦点を当てて検討を試みた。性は一般的に生物的意味合いが強く，自閉症児においても自慰行為などとして問題となりやすいが，本論では性別同一性 gender identity[14]の獲得を中心とした青年期における精神性的発達という視点から自閉症児の精神発達を論じたいと思う。自閉症児が性別同一性をめぐる問題に直面した際に，その困難さに対してどのような対処を試みようとしているかを具体的な症例の治療経過を振り返る中で，自閉症児にとって性が生物学的，心理学的，社会学的にどのような意味をもっているかを探りたい。

＊大分大学教育学部

II．症例の検討

筆者が現在までに治療的関係をもった自閉症児の中で，治療経過中に性にまつわる様々な問題を呈した症例を通して，その背景を探ってみた。

具体的に症例の記述から述べるが，各症例の冒頭に記載された年齢は，今回の性にまつわる問題が生じた時期を示している。

1）前青年期に性別役割同一性の獲得の困難さを呈した症例

症例1　11歳，男性（1974年10月生まれ）

IQ 106（田中・ビネ式）

主訴：女ことばを使ったり女のしぐさをしたがる

発達歴：兄，両親の4人家族。もともと視線が合いにくく多動で落ち着きがなかった。2歳，少し出現していた単語レベルの発話が消失した。某児童相談所で自閉症と診断された。3歳，ことばが再び出始めたが，しばらくは反響言語が続いた。父親は熱心に言語指導を行い，自宅にベニヤ板で行動療法のための箱を作り，その中に子どもを入れて学習させるほどであった。父親のこうした熱心さが関係したのか，幼児期から男性をみるとひどく脅えるようになった。男の人から声をかけられると泣くが，女性からの声かけにはうれしそうに反応していた。幼稚園でも分離不安が強くよく泣いていた。

小学校は普通学級に入学。ことばは着実に伸びていったが，女児とのみ遊び，「私，どうしましょう」「あら，いやだわ」などの女ことばを盛んに使うようになった。低学年からそうした傾向があったが，高学年になるにしたがって，ますます顕著になってきた。家族にも馬鹿丁寧なことば使いをする。編み物を母から習ったり，ピアノの練習に明け暮れる。男児との接触は避け，男の子の遊びには興味を示さず，父親や兄の誘いにものってこなかった。乱暴な仕草やことば使いを怖がり，嫌がった。さらには女ことばだけでなく，女児のしぐさまで真似るようになった。「きれいでしょ」「素敵でしょ」と言いながら，胸に紙をつめて膨らませたり，髪の毛をひもで結んでおしゃれをしたり，半ズボンの端をつまんでハイレグカットの水着を真似るといった調子であった。得意がっている様子で，羞恥心がない。周囲の人がどう思うかは理解できない様子であった。

しかし，学校の成績評価には敏感で，苦手な科目の授業で指名されると「誰でも間違える！いいじゃないの！」と言って反発したり，運動会で苦手な徒競争になると「走らないといったら走らないの！」と拒否する。体育の着替えの時には，腰にタオルを巻いて「見ないで！見ないで！」と影に隠れて着替え，恥ずかしそうなしぐさをする。学校で周囲の友達が奇異な目で見るようになってからは，学校での様子を母親に全く話さなくなった。このような経過の中で，小学5年の2学期終わりに当科を受診。

図1：症例1の描いた人物画（その1）

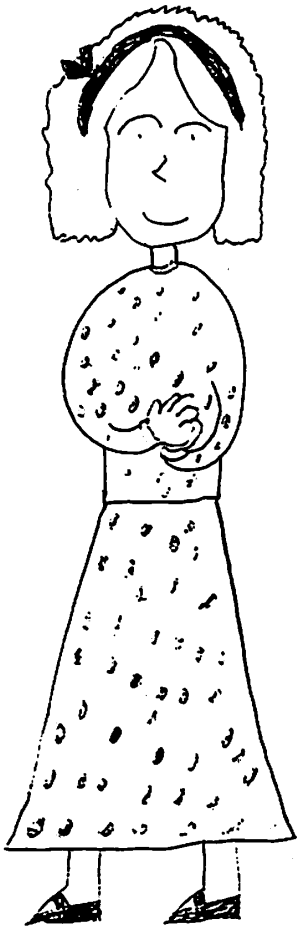
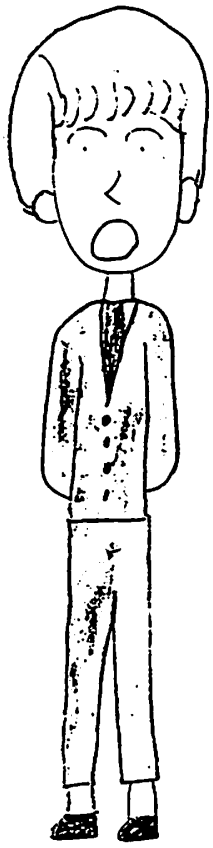


図2：症例1の描いた人物画（その2）



学業成績は上位レベル。国語は苦手。機械的記銘力は良いが，想像力に乏しい。ラジオの英語講座を聞いて独学に励んでいる。好きな絵を書かせると，図1のような女児の絵を書き，男児を書くようにいうと，図2のような細身の男性を描く。初めの頃は筆者にも脅えを示していた。知能水準に比して自己表現が乏しく，頻尿が見られ心的緊張の強さを思わせた。そこで筆者は面接を通して男性に対する脅えが減るように努めた。

小学6年になると，「誰にも言ってほしくないけど，女ことばを使ったら殴るという男の子がいます。殴られるのが嫌だから，余り使わないようにしています」と述べ，周囲の友達との関係の中で次第に自分の行動を修正しようと努めるようになった。相変わらず男性と遊ぶことは少ないが，女ことばを使うことは着実に減っていった。

小括：知能水準の高い自閉症児であるが，幼児期から極度に男性恐怖が続いたために，男児と遊ぶことを回避し，女児へ接近し，次第に女児のしぐさやことば使いを取り入れていった症例である。性別役割同一性の獲得が課題となる前青年期のギャングエージに，次第に孤立化し学校で問題となった。

症例2　10歳，男性（1975年12月生まれ）

TIQ 84（VIQ 78，PIQ 94）（WISC）

主訴：乱暴なことばを使う

発達歴：弟と両親の4人家族。乳児期，手がかからずよく寝る子であった。幼児期，1歳半からことばが増えず消失した。3歳，自閉症と診断される。その後除々にことばは出始めた。学童期，特殊学級に入学。時間に関するこだわりが強く，学校に行く時間が少しでも遅れると大騒ぎになる。学校の行事があると前日から緊張が高まり，興奮しやすい。小学5年，クラスが荒れてきた。周囲の子どものことば使いもひどくなってきた。そうした雰囲気の中で，彼も次第に乱暴なことば使いをするようになってきた。「なんだ，貴様！うるさい！だまれ！」などと所かまわずしゃべるようになってきた。母親の注意にも反発が目立ち始めた。外来で筆者に対しても反抗的態度が強く，検査の時には半身の姿勢で「うるさい！だまれ！」と何度も繰り返すといった調子であった。担任の前でも同じような調子だが，厳しく注意されると「すみません」と突然人が変わったように素直に謝るなど，乱暴な振る舞いが表面的な取り入れであることがうかがわれた。このような反発的態度が目立つ一方では，夜中に時計の音が気になって怖がり，母親の布団に潜り込むなど，依存的態度も同時に強まってきた。学校が次第に落ち着きを取り戻すとともに，彼のひどい荒れ方も収まっていった。

小括：本症例は軽度精神遅滞を伴う自閉症で，学童期にかなり適応面の進歩をみせていた例であるが，学校現場が荒れてきたことにより，周囲の子どもたちの言動を取り入れて暴言を吐くようになって問題化した症例である。前青年期になって，周囲の男児の乱暴な言動を取り入れ男らしい振る舞いを身につけつつあったが，

表面的な取り入れになっていたため，状況によって使い分けることが困難で適応上問題となりやすいことを示している。

2）性衝動の突出による欲動のコントロールの困難さが問題となった例

症例3 13歳，男性（1976年1月生まれ）

TIQ 61（VIQ 47，PIQ 84）（WISC-R）

主訴：大声で母親に怒鳴る，自慰行為を思わせるしぐさをさかんにする

発達歴：兄，妹，両親の5人家族。生後6カ月の時，3歳上の兄が水死事故。両親はショックでしばらく，テレビに子守をさせていた。1歳半で歩き出すと，多動が目立ってきた。偏食がひどかった。機械類を扱ったり，新幹線の駅名を盛んに覚えて楽しんでいた。

小学校は特殊学級。9歳，当科を受診し，自閉症の診断で以後経過を追っていたが，この頃からチックが出現。運動性チックから声のチックへと発展し，ツーレット症候群と診断された。

11歳半，ことば使いが急に悪くなってきた。周囲の大人の乱暴なせりふを取り入れて母親の前で盛んに使いたがるようになった。母親のことばのあげあしを取って「……じゃないでしょ。……でしょ。違う。そうじゃないでしょ」と，ことば使いにこだわるようになった。テレビの刑事物を見て主人公になりきって大声をあげながら興奮する。母親に反発的態度を示す一方で，母親の料理をじっと見て一緒にやりたがったり，母親に抱きついたり，母親の乳房を触りたがるなどの依存的態度も強まった。第二次性徴が遅れていたが，この頃になってやっと変声期が訪れた。

13歳，夜母親と一緒に寝たがるなど相変わらず依存的であるが，妹が着替えをしていると，見ないような素振りをして気を遣うようになった。母が着替える時は，「見るよ」と言いながら堂々と見ている。ことば使いはエスカレートして「ちんぽ」「おちんこ」などの隠語を明らさまに言うようになった。母親にはいろいろ難癖をつけては「出ていけ」とまで言うが，母親が実際に外に出ていこうとすると玄関に立ち止まって「出ていかないで」と懇願する。性衝動が高まり，冷蔵庫からソーセージを取り出し，ティッシュペーパーで巻いて両手で握り，寝転がって力むといった自慰行為を象徴する行動が出現した。現在もこうした状態が続いており，一人になれる場を確保しながら辛抱強く受け止めるように母親には助言し，経過を見守っている状況である。他人の前ではとても落ち着き，従順な態度は以前と余り変わっていない。

小括：第二次性徴の到来が比較的遅かったが，急速に母親への依存と反発が同時に出現していった症例である。性衝動の亢進による自慰を象徴的な形で行いながら性衝動の解消を図っている。本症例はツーレット症候群が合併し，衝動性の強さもうかがわせた。

症例4 15歳，男性（1971年5月生まれ）

IQ 40（田中・ビネ式）

主訴：養護学校の寄宿舎生活への不安

発達歴：姉，両親，祖父の5人家族。胎生期異常なく帝王切開にて出生。乳児期は手のかからないおとなしい子だった。視線が合わず，人見知りもなく，歩行開始後は多動が目立つようになり発語も遅れた。2歳10カ月の時，自閉症の診断を受ける。この頃，テレビの音量つまみをいじるようになり，テレビを盛んに扱うようになった。母子共に分離不安が強く，母親は患児に対して過度に干渉的なところがあった。

2歳，精神衛生センターで自閉症と診断され，その後精薄児通園施設に通園。小学校は特殊学級。中学校は最初の2年間を養護学校に，後の1年を特殊学級に通った。passive type[17]の自閉症で，指示されたことには素直に従う傾向が強く，知的水準からみると適応は良好な状態であったが，中学生になっても依然として母の監視が強く，自慰行為を寝室で発見されて注意されて以来，「触ったらいけません」と自ら言い聞かせながらも自慰行為をするようになった。異性への関心が強まる中で，TVのニュース番組で好きな女性キャスターの台詞の時にわざわざ音量を下げるという涙ぐましい努力を見せ始めた。自

慰にまつわる罪悪感が強まり，異性への関心をも罪悪視するまでに発展したものと考えられた。

母親面接の中で，患者の気持ちを考えるようになるにつれ，母親の口から患児の出生時の問題が語られた。出生直後産院で夜突然呼吸困難になり，監視の落ち度で発見が遅れたが直接母親には報告されず，看護婦の立話でたまたま耳に入り，以来強い医療不信を持ち続けていたというのである。さらに患児を出産するまえに帝王切開で産んだ第1子が，生後わずか4カ月の時ファロー4徴で死亡していたことが語られた。第1子の死に引き続いて起こった患児の出生直後の不幸な出来事が母にいかほどの衝撃と悲しみを与えたかは，筆者の想像を越えるものであった。こうした母の悲哀が面接で語られたことで少しずつ母の喪の作業が行われたことによって母子間の心理的分離が可能になり，患児も養護学校の寮生活を送れるまでになった。

小括：母親自身に子どもの障害の起源にまつわる悲しみに対する喪の作業が遷延化していたことも手伝って，子どもへの強い干渉と監視をもたらしていたのであろう。自慰行為を母親に発見されて以来，強い罪悪感をいだくようになり，性衝動や異性への関心をも否認するようになった症例である。

症例5　21歳，男性（1965年12月生まれ）

TIQ scale out（VIQ scale out, PIQ 76）(WAIS)

主訴：構音障害に対する言語訓練の希望

発達歴：胎生期，周産期ともに異常なく，生下時体重3,620 g。始歩は10カ月頃で，とても早かった。乳児健診ではとても健康な子どもといわれていた。しかし，1歳になってもことばはなかなか出なかった。1歳半，片言で「アギ（大好きの意味）」「ミンミン（水の意味）」など出現。ことばの理解力は比較的よかった。この頃，近所の工場で夜8時の終業のサイレンが鳴り響いて従業員が出社する光景を見るのが好きで家から平気で出ようとしていた。父はこれを厳しく禁じ，家に鍵をかけていた。それでも患児は鍵をはずしてバイバイをしにいくのを楽しんでいたという。父がそれを見て激怒し，外に出して閉め出したため，よく母がこっそり家に入れてやっていた。近所の伯母さんの家に行ったが，その人も父のことを気づかって家に入れず，玄関先で閉め出した。その途端物凄い声で泣き叫び，異常なほどの声で泣き続けたという。しばらくしておさまったが，以来この子はおかしくなったと母は考えている。こうして2歳の頃から，しゃべらなくなるとともに，おとなしくなった。さらには丸い物を異常に怖がるようになった。入院したら病院の丸い掃除機を見ては体をこわばらせて怖がっていた。身の回りにある丸いものは，お菓子から卵から何でも一切受け付けなくなった。テレビ番組「お母さんといっしょ」の冒頭にアニメ風のしゃぼん玉模様が出たら，それを見てパニックを呈するほどであった。

4歳，大学病院で自閉症の診断を受けたが，この頃から少しずつことばは再び出現してきた。

3年間幼稚園に通い，小・中学校は普通学級。算数，数学だけはいつもトップクラスの成績で，ずばぬけて良かったが，他の教科は低かった。特に，体育はまったく駄目だったが，限局した興味と才能を示し短期大学に入学した。それまで支配的な母親に「自分が嫌なことは人に絶対するな」とつねづね教えられてきた。患児は周囲の人の指示に過度なほど従順で，一般の道徳的価値基準からみて好ましいとされる行動を無批判的に取り入れる傾向が強かった。そんな患児が大学に入って初めて親元を離れた。すると下宿の伯母さんに見せられたヌード写真に対して「こんな本は見たらいかん」と言ったり，町中でセーラー服の女学生を見かけると極端に視線回避するなど性に対する強い否認と抑圧を思わせる態度が目立ってきた。大学に入って英語の担任が患者の構音障害に気付き，言語訓練の希望で来院。言語療法士に訓練を受けることになった。筆者の診察場面では従順で幼児性が残存していたが，大学で異性に対するさまざまな問題行動が起こっていることが判明した。女性に対して意図的に接触したり，威圧的行動を取ったり，歩行

中の女性に突然足を掛けるということで大学内で問題になっていた。しかし，大事には至らず，大学側の配慮もあって，無事卒業ができ，現在では就労し，良好な適応状態である。

小括　厳格な母親の元で，性に対する関心を否認し抑圧しながらも，異性への関心が問題行動として顕在化した症例である。

症例6　13歳，男性（1974年4月生まれ）

VIQ検査困難，PIQ 66（WISC-R）

主訴：根気が無い，質問癖，学校での不適応。

発達歴：一人っ子。父親は単身赴任のため，母子家庭同然な状態であった。母親は不安定で，子どものことを自分で背負いきれない弱々しさを感じさせていた。

胎生期は異常なかったが，周生期，遷延分娩にて3,610 gで出生。新生児期，おとなしく手がかからない子で，周囲の音にも反応が乏しかった。乳児期，あやすとよく反応はし，身振り模倣もよくしていたが，人見知りはなく，母へのあと追いもみられなかった。3歳，自閉症の診断を受けた。この頃からこだわり行為が目立ってきた。近所をうろついてガソリンスタンドのメーターを眺めて回るのが日課であった。

小学校は普通学級に入学したが，集団行動がとれずマイペースな行動が目立った。9歳頃は比較的安定していた。当時IQ 69であった。しかし，10歳をすぎて高学年になると次第に学力がついていけず，不適応状態になって，強迫的こだわりが強まってきた。

中学（普通学級）に入ってから，急に性的問題行動が出現してきた。女性の更衣室を覗いたり，不意に女性に接近したり，廊下でわざと足を出して転ばせたりして盛んに女性に接近するという強い異性への好奇心を示すようになった。中学まで普通学級に通ったが，交友関係が持てず，周囲から孤立し不適応状態にあった。そのような状態で性的好奇心が高まったために，直接的な行動で表現しようとしたのであろう。衝動性の緩和に薬物療法を施行したが効果がなく，結局特殊学級への転校を余儀無くされた。

小括　本症例の家族関係をみると，父の単身赴任で長期間母子のみの生活が続き，母子の共生関係による母親の過度な接近は患児の緊張と性への不安を高めたように思われた。そのことがこのような性的問題行動を引き起こす背景に強く存在していた。

以上の3例は思春期の到来に伴って強い性衝動の高まりと異性への関心が芽生えてきた時の反応の多様性を示している。

3）性倒錯的行動が問題となった症例

症例7　16歳，男性（1972年9月生まれ）

IQ 59（田中・ビネ式）

発達歴：姉と弟，両親の5人家族。色白で端整な顔立ちをしている。父親は自分の好きな釣には患児を連れていくことはあっても，生活面での関与はほとんどなく，弟も患児の行動を毛嫌い，始終注意をし厳しく接していた。

3歳時，当科にて自閉症と診断。小，中学校，特殊学級と情緒障害学級に併級し，自閉症療育を受けてきた。

12歳時，てんかんの発症。以後，抗けいれん剤を投与。

16歳，養護学校高等部に入学後まもなく，恥毛をトイレの中で盛んに抜くようになった。抜いた毛を便器の周辺にきれいに並べている。姉の水着をみつからないように隠しもって風呂に入りだした。風呂の中でどうしているかは確かめられていないが，入浴中に姉の水着を着たり，自室で身につけたりしている様子であった。姉は本人のしたいようにさせていた。スポーツ新聞のピンク記事を切り抜いて集めたりしている。テレビでピチピチのGパンをはいた女性が登場し，Gパンの臀部がアップになると，彼は手でテレビを被い，家族が「エッチ」と言うと，にやっと笑う反応を見せるなど，性的関心の高まりと多少の羞恥心をうかがわせた。「おかあさんのおっぱいさわりたい」「母さんの足，オッパイ触りたい。なめたい」などとあからさまな表現もするようになった。

しかし，患児はつい最近まで男子用トイレで立ち小便ができず，小便用縦長便器に腰掛けて

小便をしたり，大便用トイレで小便をしていた。チャックをおろして小便をすることもつい最近までできなかった。幼児期から潔癖症のためにおにぎりを手で直接握ることができなかったことも関係し，ペニスに直接手を触れることに抵抗が強かったようであった。

小括：立ち小便の仕方を青年期に入るまで学習することができなかったことは，患児の性別同一性の獲得過程で大きな阻害要因となっていた。性衝動の高まりの中で，性倒錯的行動によりその解消を図っていた。父親がこの子に直接的な関わりをほとんど持たず，下の弟もこの子をひどく嫌って罵倒するなど，家族の中でも特に男同志の間で険悪な雰囲気が漂っていたこともこの子の性に対する態度に反映しているように思われた。

4）第二次性徴の到来が友人より遅れたために身体像への強迫的こだわりが強まった症例

症例8　17歳，女性（1967年11月生まれ）

IQ 45（田中，ビネ式）

主訴：自分の容姿へのこだわりと強い劣等感にもとづく孤立的生活

発達歴：胎生期，周生期異常なく，満期正常分娩。生下時体重3,150 g。乳児期，あやしかけても反応が乏しく，人見知りもみられなかった。ことばも遅れたが，CMをさかんにつぶやくようになるとともに，落ち着きがなく，いつも動き回っていた。

3歳半，大学病院にて自閉症と診断。学童期（普通学級），かなりことばは増えたが，尋ねられると「言わないの」とことさらコミュニケーションを拒否する態度が見られた。しかし，徐々に友人とごっこ遊びができるようになるなど順調な発達経過をたどっていた。8歳頃から服装や化粧への関心がとても強まってきた。当時描いた人物画（図3）にもその点が強くうかがわれた。中学生活（普通学級）もどうにか過ごし，その後普通高校の障害児を対象とした特別編成学級に入学した。高校2年時，唯一の女友達が，自分より早く第二次性徴の到来を迎えたことにひどくショックを受けた。友達の乳房が大きくなったのを気にして，彼女のスカートをめくってのぞこうとするようになった。以来，自分の容姿，体つきに対するこだわりが強まっていった。いつもうつむいて，決して相手を見ないようになった。しかし，いつも周囲の人の言動を気にしては，「声が大きい，もっとやさしい声をしてください」「母も兄も他の人もみんな顔もまともで髪の毛がどこからみてもきれいにまとまっている」「私は精神も心も不順で，小さい時から今までずっと髪の毛も顔もおかしく見えるのです」（患者の記述による）と自分の身体に対する強い劣等感を語り，自分だけが醜い姿を呈しているという強迫的なこだわりとなって，日常生活にも支障をきたす状態にまでなった。面接時には毎回自分の容姿へのこだわりと劣等感を示す内容のメモを手渡してやさしい声で話すように訴えていた。時に母親に突然叩きかかるなどの攻撃的行動も出現している。精神科デイケアでおしゃれや対人行動のスキルを指導することによって少しずつ改善の兆しが見え始めている。

図3：症例8の描いた人物画（8歳時）

小括：幼児期から高い自尊心をもっていた子どもが，青年期の到来の際に友達よりも乳房の膨らみが遅れて以来強い劣等感に襲われ，自分の容姿へのこだわりが消えず，妄想化するまでに至り，現在適応障害が目立つ症例である。いかに自分の身体像に対する自尊心を回復させるか，治療が難渋している状態である。

5）異性への関心が幼児期からの漢字への興味と結びついて，漢字の人格化が起こった症例

症例9　16歳，女児（1972年10月生まれ）

IQ 66（田中・ビネ式）

主訴：他人の評価に非常に敏感になり，パニックを起こす

発達歴：胎生期，周生期異常なく，満期正常分娩。生下時体重3,150 g。乳児期，あやしても反応が乏しかった。人見知りもなく，ことばも遅れ，母に甘えることも少なかった。幼児期，多動が目立ち，幼稚園でも集団行動をとることは困難であった。家では茶ダンスの中から洋酒のビンを取り出しては並べるのを楽しんだり，絵や漢字をふすまに落書きするのに没頭していた。このようにして漢字をよく覚えていった。

小中学校と普級学級で過ごし，その後洋裁専門学校に通って現在に至っている。学校でその場に不釣り合いな行動をするために周囲から傷つくことを言われるようになり，まわりからの評価に敏感になった。「○子（自分の名前）そんなにブス？」「どうせ頭が悪いから」「○子は自閉症？」「どうせ自閉症だからな」「どうせ障害児だからな」などと自己意識が強まってきたことを思わせる言動が目立ってきた。感情が高ぶるとエスカレートしてパニック状態になるようになった。pimozide 1〜2 mg/日投与で，かなり鎖静化してきた。

もともとの漢字への強い興味が異性への関心と結びついて，「九州電力」の文字を気に入り「九」君と「州」君の二人の空想の人物を作り上げ（図4），彼らと語り合ったり，新聞の中の「九州」の文字を切り抜き，それを大切に持って枕の下に入れて寝たりするほどに漢字を人格化する

図4：症例9の描いた「九」君と「州」君

図5：「九」君と「州」君の家系図

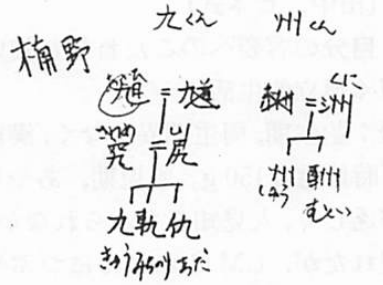


図6：様々な表情をもつ「九」君と「州」君

・・・・笑っている「九」君と「州」君

・・・・泣いている「九」君と「州」君

・・・・怒っている　「州」君

表1　自閉症と思春期の発達課題（小林 1987）

思春期の課題	基盤の主な障害	反応様式	克服の心理的機構
・仲間体験 (gang age)	社会的知覚 social awareness の障害 同時失認	孤立化	直接的関与を回避 限局した興味への没頭
・身体像の変化	身体図式の獲得の障害	拒絶・無関心 心身症反応 被害関係念慮	性を否認
・母子分離と自立	母子の過剰な結びつき	母子間の緊張の増大	自己の生活様式の獲得
・自己意識の獲得 (identity)	自他の弁別能力の障害 (自我の脆弱性)	自我理想の肥大化	教条主義的行動様式の獲得

ようになってきた。両家の家系図（図5）まで作り，漢字の太さ，形態によって表情や感情が異なるとまでいうようになった（図6）。学校での洋裁技術の習得や適応が困難になっていくにつれ，こうした傾向は強まる兆しを示していたため，担任と母親に，患児の心理の理解とともに，学校現場での技術援助を助言しながら現在までのところ，どうにか学校生活を送れている。

小括：異性への憧憬が，幼児期から続いていた漢字への関心とむすびついて漢字に対する人格化が起こった極めて興味深い例である。

III. 考　察

1．自閉症と青年期の発達課題

まず初めに自閉症にとって青年期は精神発達上どのような意味をもっているかを検討したい。青年期の発達課題がより問題となりやすい要因として，自閉症児のもつ基本的な神経心理学的ハンディキャップを考慮する必要がある。その点について小林[6]は表1のように論じている。すなわち，第1に，社会的知覚の障害や同時失認にもとづく社会化の発達が障害され，前青年期の重要な発達課題である仲間体験を得ることが困難になること。第2に，身体図式の形成不全が続いており，そのため第二次性徴によって引き起こされる心身の混乱が起こりやすいこと。第3に，母子分離と自立をめぐる問題がある。広汎な発達障害をもつために母親のケアが長期にわたって必要となる。母子関係が過度に密着したものになり，そのためさらに複雑な反応を引き起こし易いこと。第4に，自他の弁別能力の障害のために，安定した自己意識の獲得することが困難になる。その結果，モデルを通して行動規範や価値観を教条主義的に取り入れて自我理想が肥大化しやすい。そのために過剰適応になりやすく，適応上問題となる。以上の4点を自閉症児の青年期における発達課題とそれに対する克服のための心理的機構として列挙している。

2．青年期自閉症の精神性的発達について

以上述べた発達課題は性と直接的，間接的な関連性があることはいうまでもないが，冒頭で述べたように今回は特に精神性的発達の観点から論じることが本論の目的である。すなわち，自閉症児では性別同一性がどのように獲得されていくかということである。ここで用いた性別同一性とは，Tyson, P.[15]が児童期・青年期の発達過程から，中心性別同一性 core gender identity，性別役割同一性 gender role identity，性愛対象の方向性 sexual partner orientation に分けた考え方に準じた。このような観点から具体的な症例をつぶさに検討してみると，自閉症の性別同一性をめぐる問題は，いくつかの視点から整理することができると思われた。以下，順に論じてみたい。

第1は，前青年期の性別役割同一性の獲得を巡る混乱に関連した問題である。性別役割同一性は子どもの生物学的性についての親の態度に

影響を受け，子ども同志や親との意識的，無意識的な交流の中で発展していくものである。自閉症児の場合も子ども同志の交流の中で本来獲得されていくものであろうが，対人関係の障害がそうした交流を阻害したり，歪めることになって，極端な姿で問題化しやすい。自分が生物学的に男（または女）であると分かる中心性別同一性が直接問題となることは少ないように思うが，症例1，2のように，対人関係の偏りや，行動様式を取り入れる際の自我の中へ取り込むことが困難なために，表面的な取り入れとなることがその理由のひとつのように思われる。

第2は，性衝動の高まりと母親への依存欲求の亢進がアンビバレントに併存していることによって生じる心身の混乱に関連した問題である。この問題は前節で論じた第3の青年期発達課題と密接に関連したものである。自閉症児が性衝動の高まりに伴って示す行動上の変化は母親にとっては戸惑いと混乱をもたらし，必要以上に子どもに接近したり干渉したりするため，母子関係はますます心理的緊張を高め，悪循環をもたらしやすい。依存的退行が起こりやすいのも母親のとる態度を一層複雑なものにする。そのため，母親の必要以上に厳格な態度は，症例4のように自閉症児に性に対する強い罪悪感をもたらしやすいように思われる。

第3は，異性への関心が強まり，その衝動に抗しきれなくなって生じる問題である。症例3のように，自慰行動が家族内で処理されている場合は問題が少ないが，多くの場合は周囲の人々も敏感に受け止め，事は重大になりやすい。性衝動が次第に異性への関心へと発展する際に，症例6のように性に対する抑制的態度が生まれず，衝動のおもむくままに行動化を起こしてしまうことも少なくない。恐らくこうした行動の背景には異性の身体の相違を容易に認知しがたいことも関連しているのであろう。症例5のように性に対する抑制的態度が強かったにもかかわらず，大学内では異性への関心が行動化となって現れていることをみると，彼らの異性への関心は決して乏しいとはいえないように思われる。したがってそれをどのように昇華させていくか，ないし周囲に受け入れられやすい行動に結びつけていくかが重要になろう。

第4は，性倒錯的行動が顕在化して生じる問題である。これは治療関係が深まらないと気付きにくい問題である。神経症はいわば性倒錯の裏返しであるとも言われている。両者の相違は，倒錯者が自分の欲動を現実に満たすのに反して，神経症者は羞恥心，嫌悪および無意識的罪業感によってこれらの欲望を抑圧し，その結果，症状でしかそれを充足できないという[2]。つまり，性倒錯は性欲動の直接的満足を得る行動とみなせる。自閉症児で時折認めるのは，症例7のように，男児が母や姉妹の洋服や下着に触れたり，身につけたり，臭いを嗅ぐといった行動である。これらの背景には，自閉症児が幼児期から近位系（嗅覚や触覚）の感覚機能を用いやすいということも関連しているように思われる。

第5は，異性愛の対象の選択を巡る問題である。自閉症児が性愛対象としての対象を見い出すことは，最も困難な発達課題であると思われるが，異性への憧憬が生じることは，彼らがよくアイドルに熱中する姿として認められる。しかし，現実の身近な異性に対しては，直接的関わりをもつことが困難であるために，回避するか憧れの対象の域から脱しにくいように思われる。症例9のように，憧憬の対象選択を行う際に，幼児期から強い親和性をもっていた漢字に対して人格化を起こしたという例は，自閉症の精神性的発達の中で性愛対象の選択の特異性を示す例として非常に興味深い。

最後に，自己の身体イメージにまつわる女性特有の問題がある。第二次性徴の到来によって生じる自己の身体イメージの混乱が，新たな身体イメージの形成を生むことになるが，自他の弁別能力に障害を持つ自閉症児ではささいな他人との身体上の相違に過度にこだわることが少なくない。女性では特にその傾向が強い。症例8はその顕著な例である。

以上，自閉症児の精神性的発達をめぐる問題を具体的に取り上げてきたが，このことは逆に

自閉症児の性が決して健常児の心理から掛け離れたものではないことを示しているし，精神性的発達には出生以来の対人関係の発達がさまざまな形で影響していることがわかる。その中で性に対する不安が吸収され人格の中に統合され対象愛へと発展していくというのが本来の人間の発達であろうが，自閉症の場合，そうした対象愛へと発展していくことは現在のところなかなか困難な課題であるといわざるをえないようである。

3．青年期自閉症の精神性的発達の促進のための援助について

以上の6つの視点から自閉症児の精神性的発達にまつわる問題の検討を試みてきたが，こうしたさまざまな困難さをかかえている青年期自閉症に対して，どのような援助が必要とされているのであろうか。

まず第1に重要な点は，前青年期の母子関係の混乱をいかに早く収拾していくかということである。青年期の正常発達において，小学校高学年になると男の子は母親の物理的接近に対して身体の緊張や心理的不快などを感じる結果，母親の接近に反発したり，不機嫌になり，距離を持とうとするようになる。こうした男の子の心理を母親は理解することがしばしば困難であるが，自閉症児を持つ母親にはなおさら理解困難であることは想像に難くない。小林[8]はこうした状況にある家族への心理教育的アプローチの必要性を主張している。強い母子拘束からの脱皮のためには自閉症児の青年期発達の中でこの時期の心性を充分に説明し助言していくことが重要であるという。

第2に，この時期男児であれば，男らしさの振る舞いを身に付けることが当面の課題になるが，最も身近なモデルとして父親の存在が重要になる。父親に男性性獲得のための男の振る舞い方を教えていくことを父親の大切な役割として認識し協力を得られるように助言していくことが必要である。この点は性別役割同一性の獲得につながることで，症例7にみられるような立ち小便の仕方を知らないということが青年期になって深刻な問題として登場しないためにも忘れてはならない。

第3に，自閉症児にとっても青年期は母子の分離と自立が中心の課題になるが，母親の病気やなんらかの物理的な母子分離を強いる生活上の出来事が青年期の発達を大きく促進させる契機になることが少なくないが[5,9]，そうした事実はその重要性を示唆しているように思われる。

第4に，自閉症児の異性への関心の高まりをいかに周囲に受け入れられやすい形で保証していくかということが大切になる。例えば，養護学校で卒業生を中心にして行われている青年学級などは青年になった子どもたちの社交の場としての役割を果たしている側面は忘れてはならない。

最後に，彼らが人間としての自尊心を保ち，若者としての誇りや自信を持てるようになることの大切さを考えると，容姿，身なり，振る舞い方について幼児期から心を配ることがなにより大切である。そうした意味では症例8は自尊心が傷つき修復されない典型例といえようが，おしゃれを楽しんだり，スタイルをよくするためのダイエットを行ったり，時には整形美容を行うということが青年期の自閉症児の情緒の安定につながる[11]ところをみると，そのことの重要性を強調する必要がある。

以上，青年期自閉症にとって精神性的発達課題がいかなるものであるか，そしていかなる援助が必要であるかを主に精神力動的観点から論じた。さまざまな生活技術の獲得や，てんかん発症などの生物学的背景要因，問題行動の対処の仕方などについても当然考慮にいれておかねばならないことは言うまでもない。

このような発達課題を彼らなりに乗り越えることができた時，初めて彼らの幼児期からの興味の対象の発展が生活上の本当の趣味として潤いを与え，自閉症児も人生を楽しむことができるようになるであろうし，またそう願わずにはおれない。

本論の要旨は第28回日本児童青年精神医学会総会

(1987. 11. 1～2大阪)，第12回国際児童青年精神医学会（1990. 7. 16～20京都）において発表した。

症例8の学童期の診療記録を快く提供して下さいました藤本淳三先生と岡本正子先生（大阪府立中宮病院松心園）にお礼申し上げます。

最後に，本論の御校閲をしていただくとともに，今日まで終始暖かく御指導下さいました村田豊久院長（村田クリニック），ならびに福岡大学医学部精神医学教室在局中多くのご助言をいただきました西園昌久教授に心より厚くお礼申し上げます。

文　献

1) DeMyer, M. K.: *Parents and Children in Autism*. John Willey, New York, 1979.（久保紘章・入谷好樹訳：自閉症と家族―児童編，青年編―．岩崎学術出版，1986，1987.）
2) Freud, S. 懸田克躬訳：フロイド選集　第5巻，性欲論．日本教文社．1969.
3) Gillberg, C. & Schaumann, H.: Autism: Specific problems of adolescence. In Gillberg, C.(ed.): *Diagnosis and Treatment of Autism*. Plenum Press, New York, 1989.
4) 服部祥子編：障害児と性―思春期の実像．日本文化科学社．1989.
5) 小林隆児：自閉症児の精神発達と経過に関する臨床的研究．精神経誌，87；546-582，1985.
6) 小林隆児：学童期および思春期の問題―思春期をいかに乗り越えて社会的自立を獲得していくか―．山崎晃資・栗田広編：自閉症の研究と展望．東京大学出版，1987.
7) Kobayashi, R. & Murata, T.: Qu'est-ce qui est important pour que des autistes deviennent à l'âge adulte indépendants ou capables de subvenir à leurs besoins? In C. Chiland & J. G. Young (eds.): *Nouvelles approches de la santé mentale―de la naisssance a l'adolescence pour l'enfant et sa famille―*. Presses Universitaires de France, 1990.
8) 小林隆児，新保友貴：思春期の自閉症児をもつ母親への心理教育的アプローチの試み．発達の心理学と医学，1；91-97，1990.
9) 小林隆児，村田豊久：201例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題．発達の心理学と医学，1；523-537，1990.
10) 中根晃：思春期・青年期の困難性とその対応．神奈川県児童医療福祉財団編：療育技法マニュアル，第三集（自閉症編）．神奈川，1989.
11) Okuma, H., Takata, H. & Sugimachi, H.: *A therapeutic aid for establishing gender identity of two adolescent girls with specific developmental disorder*. Abstracts of 12th International Congress of International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions. Kyoto, 1990.
12) Pelling, H.: Psychotherapeutic help in adolescence. In Gillberg C. (ed.): *Diagnosis and Treatment of Autism*. Plenum Press, New York, 1989.
13) Schopler, E. & Mesibov, G. B. (eds.): *Autism in Adolescents and Adults*. Plenum Press, New York, 1983.（中根晃・太田昌孝監訳：青年期の自閉症　①個人生活の確立　②家族と社会．岩崎学術出版，1987，1988.）
14) Stoller, R. J.: *Sex and Gender*. Science House, New York, 1968.（桑原勇吉訳：性と性別．岩崎学術出版，1973.）
15) Tyson, P.: A developmental linc of gender identity, gender role and choice of love object. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **30**; 61-86, 1982.
16) 渡辺純・前田志津代・中川和子ら：一青年自閉症児の性に関する考察．小児の精神と神経，**28**；265-170，1988.
17) Wing, L.: Social and interpersonal needs. In E. Schopler, & Mesibov, G. B. (eds.): *Autism in Adolescents and Adults*. Plenum Press, New York, 1983.（太田昌孝・中根晃監訳：青年期の自閉症　②家族と社会．岩崎学術出版，1988.）

PSYCHOSEXUAL DEVELOPMENT OF AUTISTIC CHILDREN IN ADOLESCENCE

Ryuji KOBAYASHI
Faculty of Education, Oita University

Puberty and adolescence constitute a particularly critical period in the psychological development of autistic children because of their specific cognitive and communicative handicaps. The prime developmental tasks in adolescence are coming to know how to deal with the power of the sex drive and the establishment of relationships with peers or persons of the opposite sex and to become independent of one's parents. The psychosexual development of nine autistic adolescents was investigated. The way in which these autistic adolescents dealt with the entablishment of gender identity is discussed.

Six problems were identified:

1. Diffusion in establishing a gender role: Some male autistic adolescents avoid same-sex relationships because of a male phobia and may introject superficial feminine behavior. Others introject aggressive male behavior too insistently.

2. Confusion owing to ambivalence between heightened sexual drive and dependency on the mother: Mothers with preadolescent autistic children are apt to be worried and confused and to interfere and show excessive concern for their children. If the autistic child's behavior is criticized too strongly and too often, guilt feelings about masturbation may develop.

3. Intensified curiosity about heterosexuality produces an uncontrollable sex drive: The masturbation stage of sexual curiosity is dealt with within the family. If curiosity about heterosexuality is heightened and becomes uncontrollable, difficult problems that may be related to the cognitive deficit and to confusion regarding differences in heterosexuality occur.

4. Perverted behavior: To satisfy the sex drive, some autistic adolescents show a strong desire to touch, wear or smell their mother's or sister's underwear and clothing.

5. The need for heterosexual love objects: This is the most difficult problem for the autistic adolescent to solve. They show natural longings for the opposite sex: e. g., enthusiasms for pop-culture singer idols. But, they tend to avoid actual relationships with persons of the opposite sex and find it difficult to make the change from simple longing to an actual heterosexual relationship. This was seen in an autistic girl who had an affinity for written Chinese characters (*Kanji*) that represented people (e. g. names) and substituted them for personal relationships during adolescence.

6. Diffusion of the body image is specific to females: The somatic spurt during adolescence brings about confusion as to body image and provides the chance to form a new image. Autistic adolescents who have difficulty in differentiating their selves from others are, however, apt to become obsessive

about details of the differences of others. It is difficult for them to overcome this psychopathological characteristic. Autistic adolescents have the normal mental characteristics specific to their chronological ages. Psychosexual development should be achieved through the ameliorating influence of human relationships. Anxiety about sex may be lessened in such relationships, which lessening will be integrated to the ego. For autistic adolescents, who have core difficulties in establishing relationships, establishing a sexual partner relationship may be the most difficult developmenal task.

Author's Address:
R. Kobayashi, M. D.
Faculty of Education,
Oita University,
700 Dannoharu, Oaza,
Oita City, Oita-ken,
870-11, JAPAN